ヨミダス　読売新聞　【昭和40年】1965.10.17(日)　朝刊　22頁
国立国会図書館　2025年02月03日 10:42

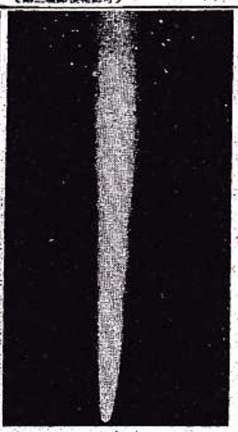
（第三種郵便物認可）　昭和４０年１０月１７日　（日曜日）　読　売　新　聞　第３１９８１号

すい星の話題

太陽に近づくと光る

ナゾの正体や長い旅行

このほど、新しい"すい星"が日本で発見され「イケヤ・セキすい星」という名がつけられました。その"すい星"は、どんどん光をましてアメリカの天文台の観測によると、太陽にもっとも近づくこの二十日ごろには、すばらしいしっぽをもった大すい星になるだろうと発表しています。"すい星"が太陽に近づくと、なぜ光をますのでしょうか。また、しっぽといわれるものはなんでしょうか。ときどき夜空にあらわれる"すい星"について勉強しましょう。



有名な「ハレーすい星」

「イケヤ・セキすい星」は、九月十九日に静岡県の池谷薫（いけや・かおる）さん(二二)と高知市の関勉（せき・つとむ）さん(三四)が発見したので、その名がつけられたのです。二人とも、前に二つずつの新しいすい星を発見しているアマチュアの天文家です。

「イケヤ・セキすい星」――右側の二つの光は星です（4日、東京天文台・堂平観測所でさつえい）

大すい星見られそう

その「イケヤ・セキすい星」は、見つかったころは八等星くらいの暗い星で、太陽から一億五千万㌔・以上もはなれていました。その後、東京天文台で観測したところは、四―五等くらいに明るさをまし、写真のようにしっぽも見られるようになりました。計算すると、この二十日ごろには一番明るい時の金星（マイナス四等）よりも明るくなり、有名な「ハレーすい星」の約半分ぐらいもある大きなしっぽも見られそうだといいます。

「イケヤ・セキすい星」の発見者池谷薫さん（上）と関勉さん

すい星が明るくなるのは、太陽に近づくためですが「イケヤ・セキすい星」は、ふつうのすい星とはちがい、太陽をかすめるように近づきます。太陽の直けいは、約百四十万㌔・ほどですが「イケヤ・セキすい星」は、太陽に五十万㌔・ほどまで近づきます。こんなように、太陽に近づく大すい星は一八四三年、一八八〇年、一八八二年、一八八七年、一九四五年にあらわれた大すい星と、近くでは二年前の「ペライアすい星」の六つあって「イケヤ・セキすい星」も、これらのすい星と同じ道すじ（き道）をまわっているきょうだいのすい星だろうとみられています。

紀元前に観測記録

すい星には、このように同じような道すじをまわっている、にたようなすい星のなかまが、いくつかあります。そのうちの有名なのをひろうと、海王（かいおう）星族のすい星と木星族のすい星があります。海王星族に、有名な「ハレーすい星」があるのです。ハレーは、紀元前二三九年から記録があるほど、古くから観測されています。そして、七十五年の周期で太陽に近づき、いままでに二十九回も観測されています。このつぎにあらわれるのは、一九八五年ごろとなっています。このほかに、周期をもったすい星は五個ほどあります。また木星族のすい星は約五十個ほど知られていますが、有名なのは三年の周期をもった「エンケすい星」です。いままでに、四十七回観測されています。つぎにあらわれるのは、一九六七年ごろです。

中心は"すなつぶ"

すい星は、こうしたなかまのほかに、とても遠くからやってくるものがあり、そのき道を調べることは、なかなかできません。これまでに、き道のわかったものは、約九百個ほどです。

ところで、すい星とはどんな天体なのでしょうか。いま考えられている正体は、中心がすなつぶのようなものの集まりで、そのつぶのまわりにドライアイスのようなものがこおりついていると思われています。こうした天体が太陽に近づくと、太陽の光熱でドライアイスがとけてふきとばされ、それが光ってしっぽのように見えるといいます。

ところが、しっぽのないすい星もかなりあるのです。それは、太陽にあまり近づかないためにしっぽができないものと、しっぽがちょうど地球にまっすぐむいていて、あっても見えないものがあるためです。

また、すい星がどうして生まれ、どこからくるかということも、まだなぞです。き道が、あまりに細長くて計算もできないようなものもあります。そうしたすい星のふるさとは、とてもわかりません。太陽の光を、ただ反しゃして光っているのではなく、太陽に近づくと自分からも光を出すなど、大きななぞになっています。

東京天文台では「すい星のいろいろななぞをとくことは、太陽系がどうしてできたかをとく大きなカギです。ですから、池谷さんや関さんのような熱心な観測者がたくさんでてくださることは、とてもありがたいのです」と、いっています。

少年少女

少年少女

野鳥の病院

もう百羽が退院

保護したりキズの手当て

キズついたハ

日本にただひとつの"市立野鳥病院"が、大阪府布施（ふせ）市永和（えいわ）小学校にあります。

この病院ができてから、もう一年になりますが、いまでは近くの府県からも、病気やキズついた小鳥がつぎつぎにもちこまれ、無料で手当てをうけています。

小学生も協力

この病院をつくることを考えたのは、同市の野鳥研究会の役員をしている宮城正吉（みやぎ・しょうきち）おじさん(六二)です。宮城さんは、去年の六月、奈良県と大阪府のさかいにある生駒（いこま）山のふもとで、農薬の中毒でたおれているツバメ、ハト、スズメをみつけました。農薬のために、小ザカナやこん虫がへっているように、小鳥たちのひがいもふえています。

それに気がついた宮城さんは「ぜひ野鳥病院がほしい」と、近くの永和小学校の子どもたちと相談しました。これには、子どもたちも大さんせい。さっそく先生たちとも相談して、校舎に病院をつくることにしました。

野鳥研究会の人たちがお金を出しあい、同校のし育部の部員二十人が労力奉仕して、高さ二㍍、はば二・五㍍、おくゆき一・五㍍の"市立野鳥病院"ができました。この病院のおく半分には三だんのたながあって、九つの病室にわけられています。伝せん病の小鳥や、タカ、トンビのようにほか[illegible]けてやります。体力が弱っている小鳥には、タマゴの黄身をといてスポイトで食べさせてやります。もし、キケンなようであったら、宮城さんが家につれて帰って夜どおし手当てをしてくれます。

し育部の子どもたちも、小鳥たちのかんご日記をつけたり、しきワラや水をとりかえたりして手助けしています。

このようなあたたかい手当てで、いままでに約百ぱの小鳥たちが古すへ帰っていきました。このあいだも、南へ帰るヒメクロウミツバメが、体力が弱って落ちましたが、入院して元気になり、大阪空港から日航機で福岡県まで送りとどけられました。

青い空

公衆道徳を守らぬおとなたち

長岡市関原中学校三年　坂垣　正

おかあさんたちに、ひとこといいたいと思います。

ある日曜日、ハイキングへ行った帰り道のことです。バスの停留所で、子どもづれの母親グループに会いました。その人たちは、貸し切りバスを予約していましたが、いっこうにこないので普通の定期バス――つまり、ぼくたちの乗るバスで帰ることになったのです。

みんな、きちんとならんで順番が待っていましたが、母親たちは列をみだし、バスがくるとさっさと乗ってしまいました。ぼくは、とてもはらがたちました。なぜなら、自分の子どもの前でこんなだらしのないことをするからです。それに、バスがとてもこんでいたにもかかわらず、その母親たちは、通路のいすをおろし、他人のことはおかまいなしにすわっていたからです。立っている人たちは、いすがじゃまして、つめようにもつめることができません。このような母親に教育される子どもが公衆道徳を守るりっぱな人間に、はたしてなれるでしょうか。

おとなたちは、ぼくたちの手本になる人だと思っていただけに残念でした。

「なんでしょう」の答え＝たく（串）上まく（蓋）匹びんのふたです。そのふたを上げてろうしたのです。

おわび　十日付「最近の知識いろいろ」の中で、乗客の多い駅としてあげた数字は一昨年度の資料でした。昨年度の第一位は、やはり東京駅で八二〇、一六二人です。第二位以下の順位も変わりません。

(C)読売新聞社 無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は読売新聞社 記事利用担当（mail: t-chizai06@yomiuri.com tel:03-6739-6961）まで